

☆MONOづくり新聞☆

～旧中村小学校の怪～



事務所は、パソコンのキーを叩く音だけが響いていた。利用者が1人もいない、電話1本さえ鳴らない、朝から雨の降る日だった。誰かが走る音がした。一咄嗟に、そう思った。ドアのすぐ向こう側の廊下なのか、2階からなのか見当がつかなかった。全身を耳にして、音を拾う。再び、ト、ト、ト、ト、ト、ト…。生き物が放つ特有のリズムと確かな重さを伴った、柔らかい何かが転がっていくような音だった。

音の正体を確かめるために、階段をあがり、鍵のしまっていない部屋に入った。生き物の気配は一切なかった。音を拾おうと目を閉じてみたものの、壁掛け時計の時を刻む音だけが無機質に響いていた。

音を奏でることを止めてから久しいグランドピアノが、部屋の片隅で、やたら艶っぽく見えた。得体のしれない音と黒々と光るピアノの組み合わせに、芥川龍之介の「ピアノ」という作品を思い出していた。



或雨のふる秋の日、わたしは或人を訪ねる為に横浜の山手を歩いて行つた。この辺の荒廃は震災当時と殆ど変わってゐなかつた。若し少しでも変わつてゐるとすれば、それは一面にスレエトの屋根や煉瓦の壁の落ち重なつた中に藜の伸びてゐるだけだつた。現に或家の崩れた跡には蓋をあけた弓なりのピアノさへ、半ば壁にひしがれたまゝ、つややかに鍵盤を濡らしてゐた。(中略) 雨は幸ひにも上つてゐた。おまけに月も風立つた空に時々光を洩らしてゐた。わたしは汽車に乗り遅れぬ為に出るだけ足を早めて行つた。すると突然聞えたのは誰かのピアノを打つた音だつた。いや、「打つた」と言ふよりも寧ろ触つた音だつた。わたしは思はず足をゆるめ、荒涼としたあたりを眺めまはした。ピアノは丁度月の光に細長い鍵盤を仄めかせてゐた、あの藜の中にあるピアノは。——しかし人かげはどこにもなかつた。芥川龍之介「ピアノ」より